

日本セ大家政 ○門倉芽枝 相賀貴子 吉野美智子

常盤学園短大

富田教代

日本セ大計算研

二宮玲子

目的 市販食品の塩味に対する感じ方は、ひとによって千差万別である。この感じ方も長年の食生活で築かれ、時には、高血圧や心疾患などに悪影響を及ぼすこともある。

そこで、市場に多く出廻っている市販食品で、比較的食塩を多く含んでいる28品目ととりあげ、その食品の塩味に対する意識を調べた。また、よく使う市販食品と調味料の使用頻度から食塩摂取量を算出し、食塩の摂取状況を推察してみた。

方法 対象は無作為に抽出した都市部（東京およびその近郊）に居住する男895人、女1360人と農村部（静岡県、茨城県）に居住する男573人、女781人であった。調査時期は昭和56年7月上旬より9月上旬と昭和57年6月に行った。

よく使う食品は、家族使用量より1人1日当りの量を求め、三訂補日本食品標準成分表よりNaを求め、食塩量に換算した。調査データの解析は電子計算機ACOS-300により行い、市販食品の塩味に対する意識についてクラスター分析を試みた。

結果 I市販食品の塩味に対する意識調査 — ①都市部の女には、ほとんどの食品について、 $p < 0.01$ で年代差がみられた。②多くの食品の塩味に対し性差がみられた。全体的に、女は「すごく塩辛い」と感じる割合が多く、男は「塩辛くない」と感じる割合が多かった。③地域差があり、都市部の人には「すごく塩辛い」と感じる人が多い。④クラスター分析により6つのグループに分類できた。

II 28品目のうち食塩含有量の多い食品は、都市部より農村部に多く使われ、これらから算出した食塩量も多かった。